

# 戦後の臨床心理学の役割と「問題児」像の変容

——品川不二郎の教育相談を中心に——

堀 元 樹

(先端総合学術研究科一貫制博士課程)

本論文の目的は、戦後の学校教育に臨床心理学とその手法がどのように導入されたかという点について、教育相談の対象である「問題児」像を分析することである。本研究では1950年代初頭までの品川不二郎の活動に焦点を当てた。以下の知見が得られた。第一に、品川の教育相談は、戦前の学校の教師たちに広く浸透していた「問題児」像を書き換えた。「問題児」の概念は、精神衛生の観点から捉えることにより、学校教育に取り入れられた。そして人格を測るための検査の導入とともに、臨床心理学の手法が道徳教育に利用されるようになった。第二に、インドネシア人との比較研究を通じて、彼は「日本人の国民性」を強調した。そこで臨床心理学の役割は、国際社会に適応する日本人の育成にあったことが示された。それゆえ、臨床心理学の知は個人の不適応だけでなく、集団に適応できるかどうかにも応用された。しかしながら、これを集団に応用するには多くの異なる概念を必要とするため、「問題児」や「不適応」などの概念をさらに区別する必要がある。第二次大戦後、「問題児」の行動様式を心理化させる試みが、学校教育で行われていたことが明らかになった。

キーワード：臨床心理学, 問題児, 品川不二郎, 教育相談

立命館人間科学研究, No.39, 25-38, 2019.

## はじめに

教育相談は、1965年文部省刊行の『生徒指導の手引き』に生徒指導の一環として明記され、初めて学校教育の指針に位置づけられた。現在、カウンセリング等の子どもを理解する方法の一つとして臨床心理学の技法が、教育相談などの専門機関だけでなく現場の教師にもその技法が用いられている。こうした臨床心理学の技法は、戦後、教育相談やガイダンス運動などとともに学校教育へ導入され、子どもの正常な発育を促すことを目的としたわけだが、どのような子どもを対象としてきたのだろうか。

ガイダンス運動が盛り上がりを見せた1950年前後、文部省は戦後の生徒の不良化解消のため

に、学校教育にカウンセラーの設置構想を「生徒指導主事」という名称で進めた(保田2001)。当時、臨床心理学者の動向は、1950年に鈴木清(1906-1982)、戸川行男(1903-1992)他が東京で「臨床心理研究会」を設立し、1953年に日本応用心理学会に「臨床心理部会」を設置するなど臨床心理学集団の組織化に寄与したが、まだ全国的な集まりではなく(下山・丹野2001)、結局は文部省の進めていた教師カウンセラーの法制化は実現できなかった(保田2001)。しかし、こうした学会の設立で、臨床心理学は医学領域(精神医学)だけでなく、教育領域に広くかかわるようになり(赤津2014)、なかでも「臨床心理研究会」の中心人物である教育心理学者の鈴木清は、日本応用心理学会に臨床心理の分科会を設立したとされている(安齋他2006)。心理

テストなどを用いた「問題児」の研究や精神衛生運動が「臨床心理学」という名称のもと行われ、臨床心理学が教育相談の枠組みで機能していたのである。また、高木（2006）によると、田中寛一（1882-1962）のもとで臨床心理学の普及に尽力した品川不二郎（1916-2012）<sup>1)</sup>は、現場教師の依頼によって行われる学校教育相談という形で、現場教師の日常的な悩みを解消するための技法として臨床心理学を学校教育に導入したとしている。品川は通常学級の中から「問題児」を見つけ出すために、「正常児」も対象とした教育相談を実践した。しかし、個人を対象とする臨床心理学が、集団を対象とする学校教育に導入する際、精神衛生及び臨床心理学が、当時の現場教師、学校教育の何を問題とし、学問的な役割を確立していったのかは、詳細に述べられない。

本稿の目的は、戦後、個人及び集団を対象として機能する臨床心理学が、学校教育にいかにして導入されてきたのかを、教育相談の対象である「問題児」像の変容を記述することを通して明らかにすることである。その際、鈴木や田中の教育相談の技法を学び、臨床心理学の導入者（鈴木他 2011）とされる品川の教育相談を中心に述べる。また、本稿では、学校教育相談が展開される以前の、心理テストがブームとなり（山下 1982）、ガイダンス運動が高まりをみせた1950年前後に着目したい（芳我 1991; 保田 2001; 宮田他 2009）。

このように、日本の戦後における臨床心理学が、いかにして「問題児」像を構築し、学問的な役割を明示してきたのかを解明することは、学校教育のあり方を考える上で重要であると考えられる。また、本研究の対象である品川不二郎は、非公表ではあるが、2012年3月8日に逝去している。そのため、倫理的配慮は不要である。

## I. 品川不二郎の教育相談と臨床心理学の 学校教育への導入

1925年4月1日、文部省は東京府少年職業相談所を開設するなど、職業紹介所で青少年の性能診査を行うことを推し進めた。1927年11月25日に文部省訓令が出され、教育相談は個人の能力に応じた個別学習と職業指導（学校選択を含む）を役割の一つとされた（片岡 1923）。1930年代になると都市部で普及をみせ、様々な心理学者によって教育相談の役割が見直される。子どもの異常性の発見、即ち精神に問題（性格に異常）のある「異常児（童）」発見に収束するのではない、精神に問題のない「正常児（童）」を対象とした教育相談の役割が一つに挙げられた（青木 1935）。また、教育相談は「異常児」を第一の対象とし、こうした児童の行動上の問題を治療するだけでなく、予防的事業が行われる必要性が説かれた（山下 1937）。さらに、吉村（1938）は東京文科大学教育相談部の4か年を振り返り、学業不振児を例に当時の教育相談を振り返る。「彼らは特殊学校へやるには智能が高過ぎるが、さりとて竝の生徒と歩調を揃へて行くには餘りにも才能が少な過ぎる」（吉村 1938: 53）として、特殊学校の対象ではない、知能が低くはない学業不振児の取り扱い方を課題に挙げる。この頃、1933年4月8日に浅草寺児童教育相談所が創設されるなど、子育てに悩む母親たちが、我が子を自発的に相談所に連れてくる動きがみられるようになった。このように、教育相談が機能してきたことにより、少なくとも母親たちにとって「問題児」かもしれない子どもを相談所に連れてくる潮流があったのである。一方で、当時の教師や母親たちは「問題児」を相談所に連れて行くことに抵抗感を持っていたこともあり（吉村 1938）、「正常児」を教育相談の対象として実施されることは少なかったと思われる。

ここまで戦前の教育相談を概観してきた。少

1) 没年は、鈴木聡志氏からの私信による。

なくとも、戦前の教育相談は職業指導を基軸に、個人を対象とする専門機関として機能し、そのことが社会事業の一つに位置付けられていた。1930年代以降、東京文理科大学の教育相談部のように、精神的に問題のある（性格の異常のある）「異常児」を対象とした教育相談から、行動上の問題を起こすかもしれない「正常児」へと対象を広げる過程にあったと言える。他方、戦後は臨床心理学の技法が学校教育に導入される等、専門機関とは別の仕方でも機能する。本節では、品川不二郎の教育相談と臨床心理学の役割を述べ、対象とする「問題児」像の変容を論じる。

## 1. 品川不二郎の学校教育相談と臨床心理学の役割

### (1) 品川不二郎と学校教育相談

1942年、田中寛一の命により、東亜研究所（政府と軍が共同で資金援助）の南方調査団に加わり、インドネシア人の民族性の調査研究に派遣される。そこで、ジャワ軍政監部総務部調査室に配属され、調査や研究活動に従事することになる。品川の調査研究は、田中寛一の諸民族の知能検査の研究結果を基にして行い、『新ジャワ』（1944）のなかの「インドネシア人の智能」として掲載されている。インドネシア人児童を対象に、その素質に重点を置き、彼らの知能を調べたものである。後に、品川はインドネシア人の研究をしているうちに、「日本人」のものの見方、感じ方、考え方、態度、行動といった日本人の特性の研究に興味を持つようになったと述べる（品川 1969: 208）。

復員したのは1946年である。玉川大学の助教授となった。この頃、田中寛一が学長、鈴木清が教授であった。当時、まず品川他が手掛けたのが、田中B式テストの再発刊であり、その研究であった。その他、上村哲弥から、アメリカの精神衛生運動について知識を啓発されたこと、ウィックマンの研究に刺激され、教師の精神衛

生に関する意識調査をしたことなども彼の研究人生に影響を与えた。当時、田中教育研究所の構想が田中寛一から出され、上野の日本文化科学社（当時の日本教材研究所）に田中が所長となり、1948年6月に附属機関として併設される。

1950年、ガリオア資金によって留学生の募集があり、米国ミネソタ大学大学院に留学することになる。専攻は臨床心理学であった。1949年にウェクスラーがWISCを発表し、品川はWISCを学ぶ。この留学で品川が教育相談に興味を持つことになる。

帰国後（1951年夏）、田中教育研究所の所員に任ぜられた品川は、臨床心理学的な教育相談を行う方針を立てる。主に母親を対象とした「心理的・教育的な相談」であった。「問題をもつ子どもを学級担任から依頼され、子どもをつれて母親が来談するというかたちで、子どもを対象に多角的・総合的に臨床心理学的に点検（診断）し、その根本原因の除去やそれへの対策を親と相談」（品川 1969: 213）するものである。品川は親を成長させていくことで、子どもを改善する教育相談の在り方を目指したのである。当時からテストによって子どもを早期に理解しようとする試みは行われていたが、田中教育研究所は有料相談であり、比較的経済的に豊かな階層の子どもの来談が多く、教育相談の対象は限定されていた。

品川は1951年の秋頃に、東京学芸大学の助教授として教育心理学教室に所属し、沢田慶輔のあとを継ぎ付属大泉小学校分校の配属となる。やがて、「付属大泉小学校に『教育相談室』を設置して、問題をもつ子どもの資料集めやテストを行ったり、親との相談を開始」（品川 1969: 211）することになる。この実践が、品川にとっての学級担任の依頼によって行われる教育相談の最初の試みであった。

1953年には、日本版WISCを児玉省とともに発表する。1950年代前半になると、品川は北区

教育研究所で個人差の研究に携わる。区内の現場の先生十数名と研究グループを結成し、約三年間、事例研究を行った。この結果は『個人差の発見と指導』（品川他 1954）に記されている。この本の巻頭で、田中寛一は現場の教師との共同研究によって個々の児童の特徴（具体的な指導方法）を論述している点で、これが契機となって今後の個性完成の教育が実現するとしている。また、坂本一郎は北区教育会教育研究所の研究が、我が国の教育に新しい展望を与えてくれると評価する。後に、北区教育研究所では、1954年9月に教育相談部が設置され、公的機関としての教育相談活動が行われる。

戦前、田中寛一の知能検査は「人間ノ選択、配置、教育」に寄与してきたが、戦後もほぼ同様の社会的役割を果たすことになる（江口 2010: 261）。品川は田中と同様、テストの開発（テストの翻訳と標準化）に取り組み、テストを用いて子どもの実態を把握し母親へ助言する指示的なカウンセリングの技法を継承する（鈴木他 2011: 1）。当時の臨床心理学やカウンセリング関係の本には、当時の日本の状況をどうとらえ、自分の提唱する理論や技法がどう位置づけられるかについては述べられないが、例えば品川の著書『心理的な診断と治療』（1952）などは心理学的な技法の紹介や理論を示している（波多野他 1987: 247）。一方で、来談して行う知能検査とは別の仕方、学校教育で適用可能なテストを開発し、臨床心理学の技法を導入すること、また、現場の教師の依頼によって行う「学校教育相談」の形で実践したという点で異なる。こうして「臨床心理学が学校教育のなかにはいりこみ、学校教育と密接に結びついたといえる」（品川 1969: 222）としている。臨床心理学が学校教育に入り込むことによって、単に「異常児」の診断や治療だけでなく、学校の正常な問題にも取り組み、「問題児」の早期発見を行い、「学校教育を精神衛生の観点から吟味する」（品

川 1969: 222）ことがその役割に示されたのである（品川 1969: 222）。

したがって、品川の1940年から1950年代前半の研究の中心は、教師からみた「問題児」像を調査し、臨床心理学の観点で捉え直す必要があった。

## (2) 適応の心理と現場の教師の要求

戦後、急増した「問題児」の調査研究に対し、「不良化傾向の早期発見」「非行調査」などの鑑別法が進んできた。そのなかで知能検査の改定等も一つに挙げられ活用された。

人格（パーソナリティ）の形成や発達の問題は、戦後の新しい時代における教育事情の変化や児童を理解し直すための必要な要素として取り上げられた（阪本 1953: 14）。そのなかで「適応」の概念による研究が進み、治療の研究が増え、「精神医学と連携したもの、精神分析学を応用したものなど、精神衛生ないし臨床心理学の領域が平原の草を焼く勢でひろまりつつある」（阪本 1953: 15）とし、心理学者の適応の心理への関心が高まっていた。また、岸田（1950）によると当時の現場の教師は教育心理学への関心が高かったとし、特に小学校教員は教育心理学に対する関心が高く、「小学校では全体としての人間の育成、すなわち社会人として社会に適應する人間の育成の技術としての精神衛生」（岸田 1950: 66）は最も関心が高いとしている。そのうえで、「臨床心理学への要求が、教育実践家から非常に高まっている。ものいわぬ内向的な子供の心理とその取扱いなど、教育実践家にとって切実な問題である。次に多いのは学業不良児の指導および心理」（岸田 1950: 66）とし、「現職による教師は臨床心理あるいはガイダンスとでも呼び得る部分について具体的な指導の在り方を望んでいる」（岸田 1950: 67）と述べ、社会適應を目的とした具体的な指導方法、つまり臨床心理やガイダンスの技法が現場教師の要求とし

であったことを明らかにしている。

当時の我が国の適応の心理は、アメリカ由来の教育心理学を参照したもので、臨床心理学者である外林（1916-2012）は日本人には日本人らしい適応の心理を考えればよいとし、「アメリカ人と日本人はことなる、というところにパーソナリティや適応の問題がある」（外林 1950: 8）と述べる。「アメリカの社会的文化的基準に対する適応不能がアメリカの患者であり、日本の患者とはその文化的社会的基準がことなる」（外林 1950: 9）として、日本の文化・社会的側面を考慮して作成された田中ビネー式テストの測定を例に挙げる。

このように、戦後初期、アメリカ由来のガイダンス運動が高まりをみせたころ、現場の教師による臨床心理学の技法の要求が高まり、パーソナリティや適応の問題、カウンセリングの研究が多く行われた（芳我 1991）。芳我はカウンセリングの方法については、非指示的か指示的な手法をとるかで立場をめぐる議論があり、1951～1955年は「導入後間もないカウンセリングがまさに百家争鳴の観を呈しており、それぞれの立場を確立することができないままに、自己主張が混在している状態」（芳我 1991: 35）で、大学で専門的なカウンセリングの実践が行われにくい状況にあったと述べる。また、当時、高等教育で受け入れられたのは正木正や友田不二男といった非指示的・ロジャーズ理論を基礎とした臨床心理学の技法はわずかで、1951年のSPS研究集会で示された講演ではいわゆる指示的傾向を有した臨床的カウンセリングであったことにも言及している（芳我 1991）。よって、当時のカウンセリングの主流は指示的傾向を有した技法であり、品川不二郎もその一人であった。

以上のことから、当時の現場の教師は内向的な子供や学業不振児に関心を持ち、彼らの指導方法に、臨床心理の技法が適用されることを望

んだ。その方法にテストが用いられ、(指示的な)カウンセリングの技法が受け入れられる一方で、非指示的な臨床心理学の技法は受け入れられにくい状況にあったと考えられる。品川は、こうした現場の臨床心理学の要求とカウンセリングの技法の受容を、非指示的な技法とは異なった仕方でも導入することになる。

### (3) 臨床心理学の役割と「不適応」問題

品川は、占領期に米軍三六一病院（現同愛記念病院）を訪問している。同病院は、精神科が主でステーション・ホスピタルと呼ばれる。つまり、精神病院であった。そこには、米国の心理学者、精神分析医、そして知能テストやロールシャッハ検査などを行う専門家がいたという。また、このような進駐軍の病院組織の中に存在する臨床心理部や心理学者を紹介している。品川と対談した心理学者ホックは、この病院の主な目的は軍隊生活に適応できない兵隊を診断することだと述べる。「あらゆる程度の不適応者は皆一応ここに送られて、臨床心理学者の診断を受ける」（品川 1950: 42）、その対象は「所謂『問題行動』（Behavior problem）を示す兵隊」（品川 1950: 42）である。一方、「治療」を要する患者を他病院へ搬送するのだという。しかし、診断を受けにくる患者の中には、適応しえない兵隊だけでなく、進駐軍の家族や学校の「問題児」なども来ていた（品川 1950: 42）。

この訪問以降品川は、保健衛生の立場から「一般人」の診断も臨床心理学者が行うというホックの考え方に沿って、この病院での臨床心理学の役割を次のようにまとめる。即ち、他病院へ搬送する程度の「不適応」者は、医学的な治療が施されるので臨床心理学ではそれほど問題にならない。他方、臨床心理学に求められるのは医学的介入を必要としない「不適応」者の診断である。また、臨床心理学の治療は生物学的な欠損や病理現象を治療するのではなく、表面に

現れる行動や内面的な行為を修正する治療であるとしている。

また、青年の精神的不健康の治療の問題に言及し、「不適応」という概念について、「異常」との相違から説明する。その治療法に心理療法を例に挙げる。

例えば「知能の優れた生徒が学業不振であったり、ある生徒が学校場面だけで集団行動に参加できないような反抗や退行の現象を表すとすれば、それは必ずしも異常ではなく、不適応というべき」(品川 1954a: 86)であると、「異常」との違いを示す。「異常者は不適応になるが、不適応者は必ずしも異常ではない。たとえば、知能の低い生徒が学業不振のために無断欠席や放浪をはじめたとしても、それは不適応者ではあっても異常者とはいわれない」(品川 1954a: 86)ので、「正常者」のグループに属し、「異常者」を対象とする精神医学で行われる心理療法の必要はなくなる。しかし、品川は「異常者」を対象とする心理療法という従来の精神医学の立場ではなく、日常生活における「適応／不適応」者を対象とする臨床心理学の立場から心理療法のあり方を考える(品川 1954a: 86)。「心理療法の中心的対象となるものは問題行動(問題行為および問題性質)であるといつてよい。そしてそれは必ずしも特殊教育でいうところの性格異常児だけをさすのではない。性格異常児は心理療法の対象ではあるけれども、対象のすべてではないことは不適応と異常を区別するという前述の考え方からきている」(品川 1954a: 87)とし、「異常児」を対象とした精神医学とは異なる「正常児」グループにも属する「不適応」の概念を、臨床心理学の独自性として位置づける。

このように、品川の教育相談の考え方は、(現場の教師からの依頼によって行われる)「不適応」になっている者及び「不適応」になりそうな者の、個別の問題行動(ケース)を記述し、診断・治療する立ち位置をとる。臨床心理学の独自性は、

「異常者」のみを診断するのではなく、精神的に問題はないが問題行動がみられる「不適応」者、かつ他施設への移送を行わない程度の「不適応」者を診断し、臨床心理学的な治療(心理療法)を行うことであり、「不適応」にならないように早期発見のため「正常児」を診断することも臨床心理学の役割であることを示したのである。しかし、こうした臨床心理学の考えを学校教育に導入するには、教師の「問題児」像の書き換えが必要であった。

#### (4) 精神衛生学の「問題児」像と適応した「人格」

品川によると、教師から見た「問題児」は、教室内では授業の妨害となる行動、教室外では盗癖・乱暴・反抗など「教師の重大視するものは児童の攻撃的態度」(品川 1949: 33)で、これらの児童は「問題の児童」とされる。一方、引込思案で陰気な児童は、教師に行動上の問題ではなく、「問題児」とみなされない。「教師は概して精神衛生の専門家とは反対の評定」(品川 1949: 33)をすることが示された。しかし、品川は表面上確認できる行動(教師の「問題児」像)よりも、精神衛生の専門家の重要視する問題を、人格上の問題として問題視する。

また、品川はこの意識調査の中で、適応の問題を(1)児童自身の人格の適応に関する問題、(2)社会の規則に対する個々の児童の適応の問題の二つに分け、前者は精神病の問題、後者は犯罪のような反社会的な行動へ導く問題と説明する。引込思案で陰気な子どもは(1)に該当し教師は問題視しないが、精神衛生の観点から考えると「問題児」であるとする(品川 1949: 31)。このように、品川は、これまでの教師は表面化した行動問題のみを「問題児」像の要素と捉えていたが、将来「不適応」の問題を起こさないために、子どもの「不適応」の徴候に対し、対策を講じることを現場の教師に求めたのである。

さらに、「不適応」問題を起こす原因は「人格」

にあるとし、子どもの行動（Behavior）を「行為」と「人格」の二つの層に分けて説明している。「外面的な他から直接見ることの出来る『行為』の面と、外からは直接には見えないが、行為を起させている基礎としての『人格』」（品川 1954b: 16）である。「行為」は、テストなどの客観的量的な測定的方法により把握できるが、「人格」は「行為」の真の意味、全体の位置づけとして、「人格の統合」の問題であると説明する。このように、「人格」は「個人の中における傾向および過程の全体的構造」（品川 1954b: 17）として捉えることができ、各人の差があるので、「不適応」問題を考えるときには、人格の個人差に着目する必要があると述べている。

品川は、戦後直後までの教師が抱く「問題児」像（表面上の行動上の問題）を、精神衛生学の立場から「問題児」を捉え直すことで、「問題児」を「不適応」や「人格」の問題とともに記述することを可能にしたのである。現場の教師へ、子どもが将来「不適応」にならないための精神衛生の考え方を示したのである。品川の説明する、統合された人格（適応した人格）は、戦後の学校教育における理想の人間像に掲げられることになる。

## 2. 道徳教育への臨床心理学の適用

品川は、1950年代前半にWISC等、学校向けの知能テストを考案し、学校教育における臨床心理学の位置づけを明示する。

品川は、「非行」の原因を精神衛生の観点から捉える、道徳教育の考え方を示す。「非行」等の「道徳的不適応」を起こしている児童生徒には必ず「非行」を起こす原因があり、精神衛生の視点、つまり正常のグループ（通常学級）を診断の対象とし、通常学級における「不適応」の児童を診断し治療することが道徳教育の基盤であると説明する（品川 1953a: 49）。また、道徳教育を二つに分け臨床心理学の役割を述べている。一

つは修身復活論のように上から表から理屈から教え込む教育、もう一つは下から裏から情緒からの教育である。臨床心理学は後者に該当し、「道徳的不適応」がみられる児童生徒には内部的な情緒的緊張がみられるので（品川 1953a: 49）、こうした児童生徒には臨床心理学の診断と治療を施す必要性を説く。このような「非行」などの道徳的な問題を臨床心理学が取り扱う「不適応」問題に回収される論考は、臨床心理学の知が道徳教育に導入することを可能にしたのである。臨床心理学に基礎付けられた道徳教育の展開である。

こうした「道徳的不適応」の児童生徒を発見するために、児童生徒の道徳性を診断する田研式「道徳性診断テスト」が用いられた。品川によるとこのテストは、「行為」ではなく「人格」を評価し道徳性偏差値で算出するテストで、道徳的行為を対象とせず、心情も含む道徳的判断のみを取り扱うものである。偏差値の低い者は、プロフィールの著しい凹凸や知能との相関があることが事例から示された。しかし、その事例のなかには「知能は高くても道徳偏差値の低い生徒もあり、知能は低くても道徳的判断はあまり悪くない生徒もいた」（品川 1953a: 50）とし、知能と道徳性には相関がないこともあり、道徳的判断と道徳的行為の関係に理論的な課題があると述べている。こうした課題を解決するためには、「児童生徒の内面的な問題を診断することが道徳教育の先決問題である」（品川 1953a: 51）とし、そのためには非構造化と道徳性という二つの条件を満たし、観念論に陥らない科学的な位置づけが必要であるとしている（品川 1953a: 51）。第一に、答えが限定され個性を自由に発揮できる形式ではなく、「各個人のもっている考え方、感じ方、情緒的なものなどを充分吐露させるためには、問題の非構造化を計らなければならない」（品川 1953a: 51）と説明する。当時、東京学芸大学助教授であった辰巳敏夫（1919-

2005) は、従来の道德テストと道德性診断テストの内容や使い方を比較し論じている。辰巳によると、道德性診断テストは戦前までの構造化された設問形式とは異なり、非構造化された問題解決型の設問形式で、「道德性を中心問題とした適応性の問題であり、したがって適応性の検査として用い」(辰巳 1953: 36) ることが可能であるという。適応性の診断に道德性診断テストの利用が有用であることが示されたのである。第二に、「曖昧な場面を与えて、それに対する反応が柔軟性と変化とをもちうるように、そして、個人の考えが充分吐露されるようにしたならば、より個性的で、より内面的な道德性が把握」(品川 1953a: 51) される必要がある。さらに、こうした上記の二つの条件を満たし「団体的に多数の児童生徒に実施してクラス全体の傾向を知り、また要注意児童を選び出すという、実用的有効性をもつ」(品川 1953a: 51) 道德教育が望まれることを述べている。

また、品川はこのような道德性診断テストの普及活動に取り組んでいる。1954年に栃木県教育委員会が監修し、県下の小中学校や高等学校、研究所からおよそ500名余り集まった、道德性診断テスト及び知能検査に関する講演会を行った。戦後の教育改革で人格評価の重要性は認識され重要な点を挙げている。①できるだけ科学的、客観的であること、②常に総体的・全体的な観点から評価が行われなければならないことである。道德性診断テストは道德性と知能や知識との間に高い相関が認められ、子どもの道德性の発達を評価するのに有用であることを述べている(品川 1954b)。道德的な判断は、知能の高い子どもは正しい行動を取れるとは限らないが、概して高い判断となる。しかし、低い得点の子どもは正しい行動は取れないので問題としなければならない。品川の道德性診断テストの有用性を述べる普及活動は、テストの種類や利用の仕方などの臨床心理学の技法を伝えるだけ

ではなく、教師の日常的な悩みを解消する処方の一つにテストを位置づけたのである。

こうした道德性診断テストの普及活動を行う一方で、品川は1953年、児玉省と日本版WISC知能検査の標準化を試みる。WISCの知能観はウェックスラーの知能観に基づいて作られているので、多くの性格特性を推測でき、臨床的利用の可能性が生まれると述べる(児玉・品川 1953: 49)。1950年以前から利用されてきた知能検査でも「精神薄弱児」は鑑別できるが、WISCは「精神薄弱児」とは区別された、「人格」の問題を呈する「問題児」にも適用でき、「境界線児童」の鑑別に役立つと考えられた。品川らは、この標準化により教育現場で戦前とは異なった「問題児」の発見に役立つことを、臨床心理学の役割の一つに提示したのである。

このように、品川は道德性診断テストを通常学級で利用することで、通常学級の「正常児」から「問題児」を析出することを可能にしたと言える。また、「道德的不適応」である「非行」の問題を、その原因である人格の問題に回収することで、精神衛生の視点から「道德的不適応」の問題を考えることができるようになったのである。さらに、道德性診断テストはパーソナリティ・テスト(人格検査)の一部に利用可能であることを示した。よって、「非行」などの人格の問題はテストによって評価され、テストの点数によって「正常児」と「要注意児童」や「境界線児童」の弁別が可能となったのである。道德性診断テストは「要注意児童」を、WISCは「境界線児童」を析出するのに役立ったのである。双方とも、「精神薄弱児」とは区別された人格の問題である、「問題児」を鑑別する機能を持つ。

ここまですべてを整理すると、品川は、戦後日本人の「不適応」問題に対処するために、戦前までの「問題児」像を精神衛生の視点から捉え直すことを現場の教師に求めた。1950年以降、個人の「適応／不適応」問題、つまり臨床心理の問



題は「人格」を評価することを通じて、相談所などの専門機関だけでなく、テストの導入等で学校教育の中での役割を見出したのである。臨床心理の役割は、人格の問題を科学的な見地で捉えるテストの導入により、（正常グループの）集団を対象とした「適応／不適応」の診断に役立つことを示したのである。

### 3. 「人格不適応」児の特性

これまで、人格に問題のある者は「不適応」の問題を起こすことを述べてきたが、本項では、人格の構造に着目した品川の記述を取り上げ、「人格不適応」児の位置づけを述べる。

品川は、歪みのある人格の状態を二つに分け、「人格不適応」を規定する。一つは不均衡または不統一、もう一つは情緒的緊張であり、不均衡状態を均衡状態へ、また緊張状態の解消のメカニズム（適応機制）が働いて外からみられる「徴候」であると説明する（品川 1954c: 41）。「学校や家庭で問題児としてもてあます子どもの中には、誰でも気のつく“行動問題”という徴候をあらわしている」（品川 1954c: 41）ことが多く、表面化された徴候は発見しやすい。しかし、人格の状態を考えるとときには「内面的、基礎的な誰にでも軽視されがちな“人格的不適応”」（品川 1954c: 41）に着目する必要があると述べている。つまり、「社会的に承認されない行為は、他人の目にとまりやすく、したがって注目や批判や罰の対象となりやすい」（品川 1954c: 42）が、「人格的不適応」は社会の法則や道徳を侵害しないが、「健全な人格の発達を阻害して、人格に歪みが生じて、一定の個人が内面的な緊張状態、不均衡状態にあるために現在、直接に他人に強い影響を与えないが、しかし本人の将来にとっては、重大な結果を及ぼすに至るもの」（品川 1954c: 42）である。「人格不適応」児は、社会的に承認されない行動として現れ、後にひどい問題行動を起こすという。したがって、人格的不

適応の診断は、本人の行動を手がかりに「問題行動の基盤である人格的構造を知ることであり、それを探るための検査」（品川 1954c: 42）が、早期に行われ治療されることが肝要であると述べている。

これまでの品川の臨床心理学の役割の記述に即して考えると、戦後の臨床心理学の役割の一つとして、集団を対象とする人格テストを道徳教育に導入することで、「非行」等の道徳的な問題を（臨床心理学の）「不適応」の問題として捉えることであったと言える。ここでの品川の「問題児」像は「不適応」児のことであり、これは人格に問題があるので、「不適応」問題を起こす「要注意児童」や「境界線児童」も人格に問題があることになる。こうして、「要注意児童」や「境界線児童」を「人格不適応児」が統合するという構図ができたのである。

品川は臨床心理学の技法を学校教育へ導入する際、心理テストによる「問題児」の概念規定を教育相談の実践を通して検討する一方で、学校教育への運用の仕方を考えながら提示したのである。心理テストの道徳教育への利用である。テストの成績で良くない（道徳的に問題のある）児童・生徒は、道徳性診断テストや WISC によって、「人格不適応児」と規定されたのである。また、こうしたテストにより、「人格不適応児」である「要注意児童」や「境界線児童」を「正常児」から弁別し、「問題児」の行動の多様化に対処できる概念構築が行われたのである。「不適応」の要因を人格の問題にする品川の論考は、教室において「精神薄弱」とは区別された「問題児」像を析出し、道徳教育におけるテストの利用という仕方でも臨床心理学の役割を教育現場に示したのである。

### 4. 日本人の「国民性」と人間関係

品川は臨床心理学が取り扱う個人の「適応／不適応」問題とは別に、日本人の特性を臨床心

理学の視点から考察している。

1942年、品川はインドネシア人の知能の調査研究に派遣される。この調査研究によると、インドネシア人の知能の高さは、日本人の知能と比べると劣るが、諸民族との比較ではインドネシア人の知能は相当高いことが示され、オランダの圧政と搾取から解放されたインドネシア人の育成を指導者たる日本人が行う必要性を説く(品川 1944: 42)。「インドネシア人の知能」の中では述べられないが、品川は当時よりインドネシア人の知能だけでなく生活心理を比較し、日本人の「国民性」について言及している。1969年『実践学校教育相談V』の中で、日本人の生活心理はインドネシア人に比べ「気性がはげしく短期で情動的であり、たがいに徒党を組んで対抗し、競争心のかたまりで、協調心や温い同胞意識がうすいという特徴」(品川他 1969: 208)があるとしている。品川は、こういった日本人の「国民性」を問題視し、今後の国際社会において適応できないことを示した。

また、アメリカ人と日本人の社会生活を比較検討から日本人の特性を示す。アメリカ人の中には、「精神的健康」や「精神的健康のプログラム」という言葉が、日常的に浸透していると同時に、問題児やトラブルについて気軽に心理学者のところに相談に行くことができるという風潮があり、そのなかで行われる心理的なクリニックの存在は、アメリカ人の社会的な支持と理解とを背景に、組織化されるようになったとしている(品川他 1952)。一方、日本人は日常生活における物の考え方や見方に特異性があり、日本人の「国民性」に着目する。第一に対人関係における「緊張」の問題から心理的な問題(緊張)を引き起こす、第二に日本の社会における閉鎖性等における問題があり緊張が爆発し「怒り」を表出(怒りっぽい)しやすい傾向にある、第三に親子関係や家族制度や社会的慣習によって織りなされる複雑な対人関係によって冷静、客

観的な自主的な、判断を妨げる社会的条件を形成する、第四に「常に特殊の集団—家族や友人や学閥—などのグループによる色わけに重きを置き個人としての人格が比較的軽く取扱われていることを、われわれは日常的に体験している」(品川 1952: 20)として、社会性や社交性を欠如させていくと説明する。こうした社会的背景にある日本人の「国民性」は、人間関係(Human Relations)の問題を引き起こすことが品川によって示された。

人間関係について、日本国内の生活における適応形式に着目し、異民族との接触において起こる種々の「不適応」現象を分析している(品川 1953b)。人間関係における基本的現象は「相互の理解」の程度によって適応の形式が決定するという。この「相互の理解」の例に日本人と外国人の対話を挙げ、日本人が外国人に理解され難い原因を「非科学性・非自主性・非社会性」(品川 1953b: 5)の三つの基本的な性格の特徴を述べている。

第一に、「非科学性」である。「人間生活における適応の問題を考えるとときに、知能が重要な役割を演ずることは明らかである」(品川 1953b: 6)とし、人格(パーソナリティ)の構成から知能を分析している。日本人は鋭敏な勘に依存した社会的雰囲気の中で育ち、こうした環境下での知能(品川はこれを特に「知性」とする)は優れているが、欧米人が優れている科学的・客観的な視点から物事を理解する知能は高くはない。よって、日本人の行動は欧米人に理解されにくく、異民族との社会に飛び込んだときに特異な行動を示すのである(品川 1953b)。

第二に、「非自主性」である。日本人の勘に依存する知的特質が、「日本人の言語・情緒などの面における表現に特殊な役割をあたえている」(品川 1953b: 10)と説明し、日本人の表現の特殊性が非自主性の問題に関連し、微妙な対人関係を築くことに言及する。日本人は自己主張を

もたず自己価値観をもたないというのではなく、社会的承認の要求が強く（品川 1953b: 12）、「日本人の非自主性は、実は擬態であり、フラストレーションにたいする退行的反応とみるべきであり、それは不適応の徴候であると診断すべき」（品川 1953b: 12）と述べる。この日本人のフラストレーションが「不適応」の徴候であり、精神衛生上有害であるという。このように考えると、日本人が他民族と接触した時「日本人の未知の人にたいする態度」が顕著になるので、「不適応」を起こし外国人に理解されにくい状況を作り出すという。こうした「『人見知り』的傾向が、幼児の独立心や自主性の伸展を妨害する」（品川 1953b: 13）として、子どもにも同様のことが言えるとしている。表面に表れにくい「不適応」の徴候（「引込思案」や「人見知り」等）は、品川が示した精神衛生学の「問題児」が起こす行動問題である。

第三に、「非社会性」である。外国語教育を例に挙げ、日本人の非社会性が国際場面で「不適応」の徴候を示している実態を説明する。また、「非自主性は非社会性と相まって、フラストレーション場面に民族をおいこむ結果となる」（品川 1953b: 16）とし非自主性と非社会性の密接な関係性を示す。日本人の国民性の特殊性は、こうしたフラストレーション場面への防衛反応、例えば異常な勤勉さや学業成績への執着さを示すことによってなされるのである（品川 1953b）。このことから国際場面での対人関係を考えると、一方に故障が起きれば、交流は行われず、自己の社会的承認は期待できないことになる。日常生活が日本人の（品川がいう）知性を磨くのに貢献した一方、日本人の国際的協調性の発達を阻害したと述べている。こうした日本人の「不適応」問題は、国際的場面における相互の承認が期待されないことで生じる行動問題が徴候となってあらわれたとき精神衛生上の問題となるのである。よって、国際場面における日本人と

外国人の相互理解の成立には、「一方に個人または民族の自発的・積極的な働きかけと、他方に、他の個人又は他民族の意志を受容するという作用が交流すること」（品川 1953b: 16）が必要であると述べる。

最後に、これらの三つの特質の背景には、情緒的反応の特質があるとしている。日本人が怒りっぽいといわれる所以は、フラストレーションに遭遇して起こされた情緒的緊張を、爆発の形で解消する傾向にあると述べ、日本人の非科学性と情緒的反応が表裏関係にあることにも言及している。

このように、品川は日本人の性格である非自主性や非社会性という特殊性が、対人関係において「不適応」問題を起こすことを示した。情緒的な緊張はその原因の一つである。日本人の「適応／不適応」の問題、つまり臨床心理学が取り扱う個人の「不適応」問題を、他民族との接触、即ち人間関係の問題を考えることを通して、日本人の国際場面での「適応／不適応」問題を取り扱うことを可能にしたと言える。

戦後の国際社会への復帰ということを考えると、1950年代前半のテストが開発された頃、臨床心理学は日本人の「不適応」の徴候を客観的かつ科学的に分析することが期待されたと考えられる。国際社会に適応できない、客観的なデータで良い評価が得られない（テストで悪い点数）日本人の行動問題を修正することが、臨床心理学の役割の一つに示されたのである。

## おわりに

本稿では、戦後の臨床心理学の役割を、品川の叙述を中心に述べてきた。

戦後の教育相談は「異常児」発見のためだけではない、別の仕方で役割をもつようになった。そのなかで品川は、第一義的に病理的な欠陥、欠落、停止を意味する精神医学的な意味をもつ

「異常児」ではなく、「不適応児」を対象とする教育相談を实践した一人である。教育相談における臨床心理学は日常生活に適應できる否かを問ひ、病的には「正常」ではあるもの上手く機能しない、行動の問題を起こしている者（不適応の者）及び将来起こすであろう者（不適応の徴候がある者）を対象とし、「診断」するのである。

まず、品川は、現場教師の悩み（「非行」等の道徳的な問題）からの学校教育における教育相談や臨床心理学の要請を、「不適応」への「問題児」像の書き換えを教師に提示することで、学校教育へ接近を試みたのである。しかし、1950年代前半、指示的な教育相談・臨床心理学の技法を、学校教育に導入しにくい状況があった。アメリカ由来のガイダンスが教育界で受容される一方で、日教組は当時の文部省が修身科の復活や道徳教育の必要性の風潮に反発する等、実際、教育現場では生活綴り方運動に基づく生活指導が実践されていたという報告もある（保田2001）。こうした背景の中、品川は臨床心理学の知を、道徳教育を通して学校教育に導入することになる。品川は臨床心理学を、テストの標準化を通して、個人だけではなく（通常学級に適用可能な）集団を対象とし、「非行」などの道徳の不適応問題の解消に働きかける処方箋として、即ち道徳教育の基礎に位置づけたのである。しかし、このことは「要注意児童」や「境界線児童」といった新たな「問題児」を誕生させた。

また、品川は日本人の人間関係における「不適応」の問題を取り上げた。品川の抱く「日本人」像は、国際社会に適應できる人間像であり、統合された人格をもつ人間である。戦前戦中までの「国民性」、即ち閉鎖的な社会で育まれた知能を見直し、科学的・客観的な分析に優れている欧米人との良好な人間関係を築ける国際社会に適應できる「日本人」の育成を、臨床心理学で貢献しようと考えたのである。

以上のように、戦後の臨床心理学は、個人の「適應／不適応」問題を、通常学級や国際社会という集団や社会という問題を取り扱うことで、学校教育への導入を可能にしたのである。このように、戦後の臨床心理学は、国際社会に適應する「日本人」を育成することを目的に、戦後の民主化教育の要請に呼応し機能したと考えられる。その中で、教育相談は、臨床心理学の学校教育への導入を助長したと言える。

戦後、現場教師の悩みが臨床心理学を要請したという点を考えると、当時のクラスには様々な子がいて、様々な概念が必要であったこと、そのため「問題児」や「不適応児」を多くの概念に弁別する必要があったとも言える。本稿で述べたように、少なくとも学校教育に概念が導入されるという際、子どもを（病的な意味を付与させるのではなく）問題化、社会に適應できないという意味において、小児性・幼児性の行動様式を問題とし、「問題児」像を書き換える試みが、戦後、臨床心理学という学問の役割が示される過程で行われた。戦後にみられるように「問題児」の行動様式を心理化させる試みが、今後、学校教育においていかにして継承されていくのかの歴史的な分析を研究課題としたい。

## 引用文献

- 青木誠四郎（1935）教育相談所の現況とその問題。教育、3（4）、92-97
- 赤津玲子（2014）システムズアプローチのトレーニングに関する研究。龍谷大学大学院文学研究科紀要、36、210-217.
- 安齋順子・鈴木明子・中谷陽二（2006）第二次世界大戦後の日本臨床心理学の萌芽——鈴木清を中心に——。心理学史・心理学論、7・8、25-37.
- 江口潔（2010）教育測定の世界史——田中寛一を中心に——。田研出版。
- 片岡重助（1923）社会教化を中心としての学校経営方針。日比書院、197-207
- 岸田元美（1950）教師からみた教育心理学。児童心理、4（12）、64-67

- 児玉省・品川不二郎（1953）日本版 WISC 知能診断法——標準化について——. 教育心理, 1 (4), 48-51.
- 阪本一郎（1953）教育心理学の展望. 教育心理, 1 (1), 12-15.
- 品川不二郎（1944）インドネシア人の智能. 新ジャワ, 12, 37-45.
- 品川不二郎（1949）児童の問題性と教師. 児童心理, 3 (6), 31-35.
- 品川不二郎（1950）米軍三六一病院をたずねて. 臨床心理と教育相談, 1 (3), 168-172
- 品川不二郎・井上英二（1952）児童問題新書（24）心理的診断と治療. 金子書房.
- 品川不二郎（1953a）新しいテストとその構想 道徳性の診断テストについて. 児童心理, 7 (2), 49-52
- 品川不二郎（1953b）民族性（2）. 日本応用心理学会（編）心理学講座, 10, 3-24.
- 品川不二郎（1954a）心理療法の諸相. 青年心理, 5 (4), 82-87.
- 品川不二郎（1954b）講演要旨——人格の測定評価について. 教育月報, 5 (55), 2.
- 品川不二郎（1954c）人格と人格的不適応. 教育心理, 2 (5), 41-44.
- 品川不二郎（編）（1969）実践学校教育相談第V集——私の研修体験. 国土社.
- 下山・丹野義彦（2001）講座 臨床心理学-1 臨床心理学とは何か. 東京大学出版会.
- 鈴木聡志・安齋順子・鈴木明子（2011）品川不二郎氏に聞く：戦後の日本への臨床心理学の導入者. 心理学史・心理学論, 12・13, 1-11.
- 外林大作（1950）適応の心理. 児童心理, 4 (1), 7-15.
- 高木雅史（2006）教師と心理学テクノロジー——戦後初期日本における「教育相談」の導入. 松塚俊三・安原義仁（編）国家・共同体・教師の戦略——教師の比較社会学史. 昭和堂, 245-266.
- 辰巳敏夫（1953）道徳性診断テストをめぐる. 教育心理, 1 (9), 36-37.
- 波多野・山下恒男編（1987）教育心理学の社会史. 有斐閣
- 宮田徹・水田聖一（2009）学校教育相談とカウンセリング・マインド——教育とカウンセリングの関係について. 富山国際大学現代社会学部紀要, 1, 59-70.
- 保田直美（2001）戦後日本における学校への臨床心理学的知の導入過程. 大阪大学教育学年報, 6, 13-24.
- 山下恒男（1982）日本の教育心理学——その役割と思想を問い直す. 明治図書.
- 山下俊郎（1937）内外児童教育相談事業の發達. 教育, 5 (8), 113-126
- 芳我明彦（1991）日本におけるカウンセリングの歴史. 鳴門生徒指導研究, 1, 29-50.
- 吉村光雄（1938）児童相談の四ヶ年. 教育心理研究, 13 (5), 49-57

（受稿日：2018. 5. 28）

（受理日 [査読実施後]：2019. 1. 24）

Original Article

The Post-war Role of Clinical Psychology and the  
Changing Image of the “Problem Child”  
—— Focusing on Fujiro Shinagawa’s Educational  
Consulting in Japan——

HORI Motoki

(Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University)

---

We examined how clinical psychology and its techniques were introduced into school education after the war by analyzing descriptions of the “problem child”, the subject of educational consulting in Japan. In this study, we focused on Fujiro Shinagawa’s educational consulting until the early 1950s. Our investigation resulted in the following findings. First, Shinagawa’s educational consulting shaped his image of the problem child which was then widely accepted by teachers in schools before the war. By reevaluating the concept of the “problem child” from a mental health perspective, it was introduced into school education. With the development of tests to measure personality, clinical psychology techniques began to be used in moral education. Second, through a comparative study with Indonesians, he highlighted national characteristics of Japanese people. Thus, the role of clinical psychology was to foster the Japanese people’s innate characteristics and encourage them to adapt to a global society. Therefore, knowledge of clinical psychology was applied not only for individual maladjustment, but to groups as the subject of research. However, since applying this to groups requires many different concepts, it was necessary to further discriminate concepts like “problem child” and “maladjustment”. This paper shows that since the end of World War II, school education has attempted to psychologically analyze the modes of behavior of “problem children”.

**Key Words** : clinical psychology, problem child, Fujiro Shinagawa, educational consulting

*RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES, No.39, 25-38, 2019.*

---